
転生だったりしてみたり？

永月 夜刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生だったりしてみたり？

【Nコード】

N78040

【作者名】

永月 夜刀

【あらすじ】

気が付いたら死んで不思議な空間に居た彼は、よくわからないうちに物語へと巻き込まれていくことになる……

そんな感じでかきたいなーって思ってる小説です。過度な期待はしないほうが幸せになれると思いますよ？あとこの作品は二次創作です。オリジナル要素が多々含まれると思いますので原作マンセーな方はご遠慮ください。変な批判をされても返事が出来ない可能性の方が高いので悪しからず

1話 くじびきだったりしてみたり（前書き）

他のSSもUPできてないのに、また新たに書き始めてしまいました。

だって妄想が加速するんだもん！（キモッ

というわけで新作をどうぞ。（作者はプロットなどを作りません。
全て即興で書いています

1話 くじびきだったりしてみたり

……………うん。アレだ。俺はなんでここにいるんだろう？

「はい、次の人どうぞ」

……………解せぬ。たしかさっきまで仕事をしていたはずだよな？

「こちら空きましたよ」

……………いつも通り研究室で新薬の開発ラボをしていたはずなんだが？

「解せぬ……………」

「あら？あなた自我が残ってるんですか？」

「……………なに？」

「あらあら、自我が残っているということは、ここがどこかとか考
えています？」

なんだこの女は。いきなり話しかけてきたと思ったら、何故俺の考えていることが解る？

「それはですね〜ここがあのだとこの世の境目、いわゆる隔離世というところ

だからなんですよ〜」

あのだとこの世の境目……どういふことだ？俺は普通に仕事をしていたはずなんだが……

「え〜と……あ、あったあった。あなたはですね〜、隣人が新薬の合成時にしてしまったミスによる有毒性のガスのせいで死亡してしまってますね〜」

隣人のミスで死亡だと？研究室で？そんなばかな……

「幸いなことに〜即死だったみたいなので苦しくなくてよかったですね〜」

「いや、よくないだろ」

「そうですか？解毒できずに何時間も苦しんで死ぬよりはマシじゃないです？」

「比べるものがおかしくないか？」

「？」

なんだコイツは……今の話自体がおかしいとは思わないのか？どうして薬の作成中に即死するレベルの猛毒が生成されるんだ。ありえないだろうが……

「まあそれは置いておいてですね〜この箱から1枚引いてくださいね〜」

「これはなんだ？」

「これはですね〜今後の行く先を示すものなんですよ〜」

「……ちょっと待て。俺には縁日とかで見るくじ引きにしか見えんのだが？」

「引くとですね〜いろいろ出てくるんですよ〜たとえば地獄とか〜天国とか〜」

「俺の話聞いてるか？」

「この間なんてですね〜どう見ても凶悪犯って顔の人が天国行きでびっくりだったんですよ〜」

「いや、だから俺の話をな？」

「ということで1枚引いてくださいね」

明らかに人の話を聞かないやつだな。仕方ないさっさとくじを引いて別のやつに話を聞いてみるか。

「わかった。その箱から引けばいいんだな？」

「そうですよ。そしたら行き先が書いてありますから」

「君は自分に都合のいい言葉は聞こえるんだな」

「？」

まあいい。さっさと引こうか。

ガサゴソガサゴソ……

「ほら引いたぞ……ん？引いたはいいが白紙じゃないか」

「はい？白紙ですか！？」

「あ、ああ。ほら」

「……………しっかり白紙ですねえ」

行き先を決めるくじで白紙とはこれいかに？というかどうか？

「では、あちらに見える扉へ向かってくださいね」

「……………なに？」

「白紙の場合はあちらの扉になりますので」

「……………くじの意味あるのか？」

「はい、次の方どうぞ」

「聞けよ……………」

まあいいさつさと先に進もう。そう考えながら彼はその場を後にし、少し離れたところに見える扉へと向かうのだった。

1話 くじびきだったりしてみたり（後書き）

はい、ということですが新たに書き始めてみました！

ぶっちゃけストレスがマツハでヤバイです（マジで

でも身体は疲れてても妄想は出来るようなので……

寝落ちするまでの時間に書いていこうと思います。

それでも限界はあるとは思いますが……

2話 レトロだったりしてみたり（前書き）

プロローグっぽいものから抜け出せない……どうしよう……

2話 レトロだったりしてみたり

とりあえず指示された真っ白い扉の前に来たわけだが……どうすればいいんだ？

ノックでもすればいいのか？……まあ考えても進まんからやってみよう。

コンコン……

「返事が無い。ただの屍のようだ……」

……突っ込みが無いのはなかなか寂しいものだな。っと、おや？
扉に文字が出てきたぞ？

『この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ』

「……門っていうか扉じゃないのか？」

『あつ間違えた、この扉をくぐる者は一切の希望を捨てよ』

「いや、やり直しかいらから……で、入っていいのか？」

『……どうぞ』

沈黙の『…』まで出るのか、意外と便利か？まあいいさっさと入るか。

「さて、おじゃまします……かな？」

やはり返事はな n 「また負けたー！！！」……なんだ？

「くっそー！何回やっても勝てねえ！どうすりゃいいんだよ！また最初からじゃねえか！」

真っ白な部屋でえらく古い型のブラウン管テレビにFCを繋いでゲームをしている

少年が一人……それにしても殺風景な部屋だな

「ふむ、なにをやっているのかね？」

「見てわかんねえのかよ！黄金伝説でフェニックスに勝てねえんだよ！」

また古いゲームを……懐かしいじゃないか

「また最初からかよーむかつくぜえー」

「だったら最初の画面でCONTINUEを選んでパスワード画面になった時に

『とうきょうとたいとうくこまがたばんだいのがんぐだいさんぶのほし』と入れるといい」

「は？なんだった？」

「だからパスワード「まで！パスワード画面にするから！」そ、そうか……」

「つと、よし！で、何ていれるんだ！？」

「ああ『とうきょうとたいとうくこまがたばんだいのがんぐだいさんぶのほし』だな」

「……のほしつと……なんだ、結局は最初からじゃねえか」

「ステータスを見てみるといい」

「ステータス？ってなんだこれ！？めっちゃ強えじゃねえか！これで勝つる！」

懐かしいな、昔はよくやったもんだ……流石にもうFCは持ってたかったからな……

「そういえば、お前誰だ？」

「今頃か……いつ気付くかと思っていたが」

「ここにいるってことは受付で白紙でも引いたのか？」

「ああ、先ほど白紙を引いてね。ここに行けといわれたんだ」

「ふん。運いいんだな。まあいいや、とりあえず今から俺が喜びそうなものを5つ創ってよ」

「作る？」

「その珠に手をのせてから想像したら、想像したものが出てくるからさ」

「ふむ、想像ね……なんでもいいのか？」

「おう、ただし！俺が喜びそうなものだけ？それによって対応も変わってくるからな！」

なぜか偉そうにふんぞり返っているが……ようするにワイロを渡せば対応が良くなるって

ことだろうか？それもどうかと思うんだが……まあいい、とりあえず目の前にある人の頭程の

水晶？球に手を乗せて想像すればいいんだな？どれ……まずは家で使っていたテレビでも

想像してみるか。……難しい……目をつぶったほうが想像しやすいぞうだ。

「なあ、そのでっかい板みたいなのなんだ？」

「む？」

「おや、どうやら成功したようだな。自宅に使っていたSOOYのB
○AV○Aの46W型に
サウンドラックとブルーレイデッキもセットか……セットで想像し
たからか？ まあいい

「成功したようだ。これはテレビだよ」

「はあ？ テレビってのはこの四角いやつじゃねえの？ そんな薄いの
が？」

「ああ、一応新型ではあるな。自宅で使っていたものをセットで想
像したんだ」

「へえ、あ！ じゃあこのゲームもそのテレビで使えるのか！？」

BR○○IAにFC……シユールじゃないか？

「残念だがそれはどうだろう」

「なんだ、つかえねーの」

「安心しろ、このテレビで使えるものを出してやる」

「ふん。まあいいけど」

自宅で使っていたものがセットで出せるということはわかった。ならばアレも出せるな。

「今度はなんだ？なんか黒い箱みたいだけど」

「コレはP〇3って言ってな、ほぼ最新って言うてもいいくらいのゲーム機さ」

「コレが？」

「心配しなくても中にゲームも入ってるさ。やってみるか？」

「いいけど……」

とりあえずテレビに接続してと。FCやってたくらいだからコンセントも……ああ、あった
あった。とりあえずゲームは真・三〇無双5でいいか。

「じゃ、とりあえずこのゲームをやってみるといい」

「お」

さて次はパソコンでも想像してみるか。本体とアクセサリ類にコ

ントローラーにe t c…
なにやら向こうで雄叫びやら絶叫やらが聞こえるが無視だな。さて
想像想像……

「できたか。これもさっさとテレビに繋いでしまうか」

「おい！これすっげえなあ！こうどわー！ってなっでぐわーってさ
あ！」

「日本語でおk」

「ん？また何か出したのか？」

「5つって言っていたからな。自分が使っていたP Cを出してみた」

「P C？なんだそれ？」

「まあ……沢山のゲームが入っているとでも思えばいいさ」

「そーなのかー」

お前はどこの空腹妖怪だ。まあいいさっさと繋いで……と。よし、
これでいい。あと2つか

「コレはどうやって使うんだ？」

「説明が面倒なんだが……」

「だったら記憶を見せてくれればいいぞ」

「ならそれで頼む」

そんな便利な機能があるなら先に言ってくれ。ってなんだ！？もの
凄い頭痛がつー！

「ぐあああああ！」

「ふむふむー。おーなるほどなるほど。よしわかったー」

「くっ、痛みは治まったが……何だったんだ」

「ああ、記憶見るときってすごい痛いらしいぞ？」

「先に言え！まあいい。とりあえずあと2つか」

「いやーもう十分だ！だってこのPCっての、ゲームが300本くら
い入ってるんだろ？」

それに、そっちのゲーム機にも10本くらい入ってるみたいだし
な！」

「そうか、ならいいんだが。それで？結果はどうなんだ？」

「そんなの最高評価に決まってるじゃんか！すっげえなーこれ！」

そう言っではしゃいでいる少年を見つつ、彼は軽くため息をつくの
だった。

2話 レトロだったりしてみたり（後書き）

早く本編に入りたいっ！

3話 問答無用だったりしてみたり（前書き）

やっとプロローグが終われるような気がします。本編ではどうしよう……

3話 問答無用だったりしてみたり

さて、最高評価だというのはわかったが……何がどうなるんだ？そう考えているうちに
少年はなにやら受付で見たのと同じような箱を取り出した。アレか？もしかしてまたか？

「つてことで3枚引きなよ」

「まったくじかい！」

「まあまあ。早く3枚引けって」

「はあ……わかった。3枚だな？どれ……これとこれとこれでいいか」

「早かったなあ」

「こんなもん悩んでもしょうがないだろ。所詮は運なんだからな」

「いやゝ別に運だけって言うわけでもなかったんだけどなあ……」

そんな事を彼に聞こえない程度の声でぶつぶつ言いながら少年はくじを受け取った。

「まあいいか。んじゃ開けてみるぞー」

「好きにしてくれ」

「んじゃ1枚目」『無限の魔力』おゝ1枚目からいいの引いたなゝ！」

少年の手元を見ると、確かにくじには『無限の魔力』と書かれていた。だが字は汚かった。

「んじゃ2枚目」『精霊の加護』これもプラスか」

「ん？ マイナスもあるのか？」

「当然あるにきまってんじゃん。この前来たやつなんて『古代魔法使用可能』なのに

『魔力虚弱体質』のうえに『KY』だったぞ（笑）」

「それはなんというか……ひどいな……」

「だから2個連続でプラスは珍しいんだぜ！ っと3枚目だな『黄金率＋』これもプラスだな」

「黄金率？ どういうことだ？」

「一生金に困らないって思えばいいさ。にしても3枚ともプラスかゝ初めてだなあ」

「ふむ……それはまずいことなのか？」

「いんや？そんなことはねえよ。ただ、珍しいな〜って思ってたさ。まあいいや」

そういいながら、いつの間にか近くにあった、七つの球を集める物語に出てきそうなカプセル？

のようなものを操作し始めた。その物語では酸素マスクのようなものを装着していたから呼吸はできるんだろが……不安だ。

「おーし、んじゃこんなか入れよ」

「…………大丈夫なのか？」

「だーいじょうぶだって！失敗したことねえし！頭にこのわっかつけて肩まで液体に浸かれればいいだけだからさ。簡単だろう？」

「む、それなら大丈夫か。わかった入ろう」

「入ってから情報を写すのに2時間くらいかかるからなー」

「2時間ね……了解」

んじややるぞーという声を聞きながらカプセルに入る。なんだろう……微妙な温度の粘性の液体、色が薄い翠だからいいけど、これで白かったりしたら完全アウトだ

な……それにしても2時間か
寝てしまいそうな気がするんだが。まあいいか？とりあえず聞いて
みるか

「おい、もし寝てしまったらどうなるんだ？」

「んー？別に寝てもかまわねえよ？作業すんのもそれほど時間か
かenneからPC弄るし」

「そうか……微妙な温度だから寝てしまいそうな気がするな」

「なるなる。んじゃおやすみ？」

「まあ出来るだけ起きてるようにするさ」

そうして肩まで液体に浸かり、頭に環をはめたあたりで意識を失っ
た。

「まあ、魂の情報を操作するわけだから意識は無くなるけどな？つ
て聞いてねえか」

そういいながら少年は手元で何かを操作している。見た目は先ほど
の水晶球みたいに見えるが
奇妙なのは少年の手がその球の中に入っていることだろうか。

「とりあえず無限の魔力は完了だな。なじむまで暫く待つか」

そういいながらPCに向かう。そして手馴れた様子で起動させいろいろなフォルダを開いていく。

C・D・Zというドライブがあり、Zを開くとその中に『チートS』というものがあつた。

「アイツの記憶だと、この中にある小説が面白いって感じだったな。どれどれ……」

2時間後――――――――――

「おもしれえ！何だこれ、チートって面白いじゃねえか！」

そういいながら液体に浸かったままの彼をちらりと横目で見てみる。どうやら無限の魔力は

無事に馴染んだようだ。次は精霊の加護だが……

「どうせだったら俺もチートってのやってみたいな。よし！いつちよやってみつかあ！」

そうして精霊の加護は精霊王の加護へ。しかし黄金率＋＋はそのままでも十分ということが変わらなかつた。それではつまらないと考えたのか、なにかをつけようと悩んでいる少年が一人……

意識の無い彼では止めようが無い上に、この部屋には元々2人以外の人間（？）は居なかつた。よって少年はある意味暴走する。

「そういやぁコイツが気に入っていたのはFFっていうRPGだっけ？たしか4と7（各種）

と10が好きとかなんとか……じゃあ4と7と10のアイテム（ゲーム内アイテム全て）を

全部『た5』状態でインベントリに入れて：『アイテムリスト』って言えばリストが見れる

ようにして……ついでにレベル制限とか職業制限とか性別制限も無くして……使いたいと思

ったアイテムがポケットの中に出てくるようにしよう！武器はそのまま手に出てきてもてる

ような感じで！あと魔力が切れない限り自動的に補充されるように！コレは確実にチートだ

ぞ！」

一人でおおはしゃぎであつた。そして意識の無いままにチート化され強制的に転生させられる

事になった彼に安息は訪れるのか？未来は誰にもわからない。

「あ、そうだ。ついでにこれもおまけしといてやろ。コレが何か気付いたら面白くなるけどな！」

……………わからないったらわからない！

3話 問答無用だったりしてみたり（後書き）

次回からはやっと本編（転生後）に入れそうです。

こんなに長くする予定は無かったはずなのに……まあ予定は未定ってことで？

ではまた次回！

4話 俺、誕生!とか言ったりしてみたり(前書き)

やっと主人公の名前が出てきました。

それにしてもブランクがあると書くのが難しい……

4話 俺、誕生！とか言ったりしてみたり

全略

草々

いやいやいや、流石に冗談ですよ？とりあえず、真っ白な部屋でカプセルに入って寝ていたと

思ったんだが、逝けるっ！と思うほどの超絶激痛で叫びながら目が覚めたら、叫び声は何故か

泣き声に変換されたうえに滅茶苦茶寒い。でもってそれについても声を出そうとしてるんだが

また泣き声に変換されて困惑気味の俺、参上！

「無事お産まれになりましたよ」

「マリア！男の子だよっ！」

「うふふ…そんなに叫ばなくても聞こえますよ？あなた」

どうやら俺、誕生！だったようだ……って産まれた？カプセルは？どうなってるんだ？

「キミの名前は『ディアス』だ！いい名前だろう？どうか？マリア」

「ええ、いい名前ね。でも今は私にもディアスを抱かせてくれないかしら？」

「おっと！失念していたよ！さあ、僕たちの大事な息子だよ！」

「ありがとう。こんにちはディアス。私がお母さんよ」

「僕がお父さんだよ！うん、やっぱりマリアに似て可愛いなあ」

そういうながら顔をにやけさせる男性。どうやら彼らが今回の両親のようだ。だが不思議だな。

産まれたばかりの人間の子供っていうのはこんなにはつきり目が見えるものなのか？俺の記憶

では目・耳・鼻は最低数日しないとまともに機能しないと思ったんだが。まあ不都合があるわけでもないからかまわんか……む……なにやらもの凄い眠気が……

「おや？眠ってしまったようだね」

「ええ、可愛いものね」

「そうだね。なんたって僕たちの愛の結晶だからねっ！」

「うるさいわよ？」

「ゴメンナサイ」

そんな両親のやり取りを耳の端に残しながら、俺は意識を失っていった……

5
年後……

何かに頭を殴られたような気がして、俺は意識を浮上させた。そして目を開くと……

そこにはなぜか泣いている母と、怒り狂っている父がいた。一体どうしたのだろうか？

「あなた！ディアスが目を覚ましたわ！」

「何！？大丈夫かディアス！」

二人はそう言って、俺に飛び掛らんばかりの勢いで詰め寄ってくる。はっきり言って怖い。

一体なんだというのだろうか。

「……どうしたの？」

なんだろう、微妙に喋りにくい気がするんだが。

「なっ！あなた！ディアスが！」

「喋った！ディアスが喋ったぞ！」

……はあ？そりゃ喋るくらい……って乳幼児が喋ったらおかしい
kっ！？何だ！？頭が
割れるように痛いっ！

「ううあああああああっ！」

「ディアス！？ディアスっ！」

「マリア！葉だ！早く水の秘薬を！」

ぐうう……やっと治まってきたが……そうか、そういうことか……
俺の意識が初めて覚醒

した時が母の出産時だったが、今はそれから5年経っているのか。
俺の意識がなかった間の

記憶を、今視た（走馬灯のように）が……何なんだアレは？喋らな
い、泣かない、必要な

時以外動かない……心此処にあらずというか、魂のない人形のような？
俺の意識が無かった

からか？最低限の生命活動しかしていなかったとでもいうのか？…

…そりゃ喋ったら驚きも

するよなあ……

「父上、母上、おはようございます」

「デ、ディアス大丈夫なのか？」

「何がですか？」

「何がって……あんなに痛がっていたらどう？それに、今まで全く喋ることはなかったのに」

「もう痛みはないです。ずっとややとした夢の中にいたような感じだったのですが、あの痛みにより、しっかりと目が覚めましたので」

「本当にディアスなの？」

「……母上、本当にものにも僕はディアス以外の何者でもないと思うのですが」

「……もう大丈夫なのだな？」

「そうですね、意識もはっきりしてますからね」

「よかった……本当によかった……」

「それにしても、先ほど父上は凄く怒っていたようですね？」

「ああ、メイドの一人が階段の上から物を落としてしまった。それがお前の頭に当たったんだ」

「そうよ、大丈夫なのディアス？痛いところはないの？」

「大丈夫ですよ、母上」

「なんにしても本当によかった！今日はお前の5歳の誕生日だからな！」

「うるさいわよ？あなた。でもそうね、これできちんとしたパーティーが開けるわ」

「そうだな！ディアスのお披露目パーティーだ！」

本当に嬉しいのだろう。そういいながら笑いあう両親を見ていた俺は、なぜか複雑な思いだった。

まあそれは置いておいて、今は乳幼児期の羞恥プレイを回避できたことを素直に喜んでおこう。

そう思った俺だった。

4話 俺、誕生!とか言ったりしてみたり(後書き)

主人公、やっときちんと生まれることが出来ました。

ここからどうやって進んでいこう？

とりあえずはまだ妄想中なので、予定は未定ってことで！

5話 地味に生きたいと言ったりしてみたり（前書き）

妄想が続く限りはかけるといいなあと思っています。

5話 地味に生きたいと言ったりしてみたり

あの頭痛があった日から1ヶ月が経った。え？早い？気にしたら負けだよ……

とりあえずその間にあったことを簡単に説明しよう。ん？説明？誰にするんだろうね？

まあいいや。それで、出来るようになったことって言うのはまず

『ステータス情報の確認』

これが大きいね。あの頭痛で頭に使い方が浮かんできたんだけどね？普通に頭で「ステータス」って思えばいいだけなんだ。簡単すぎて逆に気が抜けちゃったよ。次に浮かんだの

がステータスを開いた状態じゃなくてもできるんだけど

『アイテムリストの閲覧』

コレの時はちょっと興奮しちゃったよね。考えるだけで書いてあるアイテムが出てくる

なんて、普通に考えたら異常でしょ？で、とりあえずリストを開いてみたら、カーソル

っていうのかな？アイテム見ながら横・上・下とか考えてたらなんか動いたんだ。だか

らつい声に出して言っちゃったよ。

「こいつ…動くぞ！」

ええ、周りからは不審な目で見られましたよ。何言ってるのコイツ？
みたいな目でね！

父と母はそうでもなかったんだけど、メイドさんとかね……目が冷たかったです。はい

あ、そういえば僕のフルネームが発覚したので自己紹介をば……

改まってするのも恥ずかしいね……まあいいや……

ディアス・グランディア・リオハート・ド・アイゼン

リオハートって……どこの装備ですか？まあそれも置いといて、
ド・アイゼンってので

わかるように貴族でした。しかも父は風のスクエアで母は水のトラ

イアングルという……

あ、気付いたかな？そう！ここはハルケギニアはトリスティン王国
なわけだ。見事な転生
だよね！死亡フラグ満載だね！

なんでさ……

まあ死ぬのも嫌なので頭痛が治まってリストの機能がわかってから、
速攻ダイヤバングルと
各種マスターマテリアを出したわけだけでも！ついでにウィザー
ドブレスまで装備したさ！
っていうかゲームの中と違ってアクセサリを何個も装備できるって
いのはいイコトだよね！？
異論は認めない！少しでも死亡フラグを減らしたいんだ！

そして1ヶ月の間に杖剣（アイテムリストからFF10のアーロンの聖印状態正宗を出した）

とも契約したし、杖とも契約した。杖はシンプルなものにしようと思っただけでも、気が

付いたらなぜか僕の身長よりも大きくて派手なものに決まっていた。さすがにコレはない……

ハリー・ポッターのような簡素な杖でいいじゃないか！なのになんなのさこれは！どうみても

FF10のユウナのニルヴァーナじゃないか！作ったヤツも転生者なのか！？しかも本物には

アビリティが付いてるはずなのに全く無いし。ちょっと派手なただの杖ですよ？重いし……

「ねえ」

それにしても杖を手で持っていないと魔法が使えないっていうのは不便だな。何かの拍子に手

から杖が離れたら、後は逃げる以外どうしようもないってことだから

らね。

「……無視するなんてひどいわ……くすん」

「ちよっ待って!?!なんで泣くのさ!?!?っていうか誰!?!?」

とりあえず今はなんでこんなことになってるのが知りたい! 僕の前には両手で顔を覆っ

てグスグス言ってる女の子が一人。その髪の毛はどうみてもピンク……嫌な予感がするけども

仕方ない、女の子を泣かせるのは男としてどうかと思うしね。でもこの場面を誰かに見られたら危険な気がするんだけどな……

「あらディオオン、そこで何をして……カトレアさん?」

ああ、母上……って、はい? カトレア……ってもしかしてヴァリエールの? ……詰んだな。

5話 地味に生きたいと言ったりしてみたり（後書き）

自分でも訳がわからなくなってきました……………

（CCFF?より）

ウィザードブレスⅡ炎・氷・雷属性の攻撃でHP回復／MP＋60
％／体力＋5、精神＋25

6話 網渡りのなにかだったりしてみたり（前書き）

そろそろ公開しようかな？とか考えてみる。

6話 網渡りのなにかだったりしてみたり

拝啓

僕を見捨ててさっさと逃げた父上様

母上に見つかってから約3時間が経ちました。

あれからずっと説教が続いています。

いい加減助けていただきたいです。

・
・
・
・
・
・
・
そろそろ心が折れそうです……

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい」

……あれ？頭がなにやら柔らかいものに包まれてる気がします。
いつの間にやら説教は
終わっていたようですが、どうやらちょっと危なかったようです。
うっかりL5を発症する
ところでした。

「だいじょうぶだいじょうぶ、もう怖くないですよ」

なんだろう？頭を撫でられている？いいにおいもする……ってちょっと待てよ？

- 1・柔らかいものに包まれている
- 2・頭を撫でられている
- 3・いいにおいがする
- 4・もの凄く近くから声が聞こえた

あれ？もしかして誰かに抱きしめられている？それにしても何だろう。凄く安心する

ような気がするんだけど。でも声は母上じゃないし、メイドさんでもない。だって聞き覚えのない声だからわかるよ。じゃあ誰だ？

「……あったかい」

「あ、落ち付いた？」

「……誰？」

いや、頭を抱きしめられて顔が上げられないわけですよ。見えな
い上に声も覚えがな
い訳だから、誰かわかるはずがないよね？

「私はカトレア、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・
ド・ラ・ヴァリエール」

「カトレア……さん？」

「もう大丈夫そうね。ところで貴方のお名前は？」

カトレアさんは、そういいながら抱きしめていた腕から力を抜き、

微笑みながらそういった。

「あ、えっと。僕はディアス・グランディア・リオハート・ド・アイゼンです」

「そう、じゃあ改めてはじめましてね？ディアス君」

「あ……はい！はじめましてカトレアさん！」

それから暫く彼女と話をしたよ。今日は俺の誕生祝いのパーティーで、いろんな貴族が家に集まってるとか、彼女の父母はもちろん姉と妹も来ているとか、彼女がまだ10歳だとか……あくまで知的好奇心なんだけども、10歳ってこんなに胸があるのか？この歳にしてさっきの感触（故意にじゃないからな！？）ではBくらいあるぞ？カトレア……恐ろしい娘っ！

それから暫くして父上が呼びに来たところで、二人で一緒に広間に行くことにした。なぜか手を引かれていたんだが、広間に入ったあたりで父上や母上の

生暖かい視線に耐えられなくなって手を離れた。カトレアさんは離れた瞬間に少し寂しそうな顔を見せたが俺と一緒に行こうと言うと、すぐにふんわりとした笑顔を見せてくれた。

パーティーの間のことは特に語ることもないだろう。来てる客はヴァリエール家以外は皆父上に挨拶に来てるだけに見えるし。ぶっちゃけ俺は居なくてもいいんじゃないか？とも思ったほどだから。そうこう考えているうちに、パーティーもお開きになり、客も帰りはじめ、ヴァリエール家の人々もそろそろ帰ろうかと言う事になった。その間も俺はカトレアと一緒に居て、動物の話などを聞いていた。最近子狐を拾ったとか、最初に拾った時には怯えていて咬まれてしまったけれど、今は懐いてくれているとか。この頃から動物好きは始まっていたんだな。そんな事を考えていると……

「ディアスはカトレアさんが気に入ったみたいだね」

「うむ、うちのカトレアも彼のことを気に入っているみたいだな」

「じゃあ彼女でいいかな？」

「そうだな。問題はないだろう」

何の話をしているのかは良くわからないが、ろくなことを言っていないというのはなんとなくわかった。

「父上、なんのお話ですか？」

「ん？ああ、ディアスはカトレアさんのことが好きかい？」

「そうですね……カトレアさんと居ると落ち着くし、凄く楽なんです」

「カトレア、お前は彼のことが好きか？」

「ええ、お父様」

「ならば」

「決まりですね」

俺とカトレアさんが顔を見合わせていると

「よかったねディアス。今日からカトレアさんがお前の婚約者だよ

「？」

「そういうことだ。かまわないなカトレア？」

「私がかまいませんけれど……ディアス君？」

「あ、ごめんなさい。ちょっと展開が速すぎて思考が追いついてきませんでした」

「私が婚約者では……いや？」

「そんなことあるわけ無いじゃないですか！」

「じゃあ、不束者ですがよろしくお願いします……ね？」

「こちらこそよろしくお願いします！カトレアさん」

「カトレア」

「え？」

「カトレアって呼んでね？私もディアスって呼ぶわ」

「あ……はい。カ……カトレア」

「なあにディアス？」

そういいながらニコニコと笑っている彼女。その瞬間悟ったね。俺は彼女には勝てない。

っていうか勝つ必要ってあるのか？……まあいいや。この時点ではまだ病気は発症してないみたいだけど、いつ発症するかわからない。俺の知識で治せる範囲だといいいんだが。

「ねえカトレア」

「なあに？」

「君は今、幸せかい？」

「ええ、幸せよ」

君のその笑顔を曇らせないように。ずっと笑顔で居られるように。俺も努力をして行こう。

6話 網渡りのなにかだったりしてみたり（後書き）

続け……

7話 呼び出しだったりしてみたり（前書き）

お久しぶりです。作者です。

お久しぶりって言う問題じゃねえぞ！っていうくらい間が空いてます……

まあなんとなくUPしてみました。

とりあえずどうぞ

7話 呼び出しだったりしてみたり

キングクリムゾン！時は消し飛ぶ！

ということとで10歳になりました。お久しぶりです。ディアスです。
いやゝそれにしても時がたつのは早いものですね……ぶっちゃけこの5年間にやっていたことと
言えば、父上と母上をお願いして自分だけの研究施設（地下工房）
を作ってもらい
必死こいてエリクサーやエクスポーションという回復薬の量産と解
析をしてたわけ
なんですよ。結果としては……エリクサー以外はなんとか再現が可
能という状態に
なれました！人体実験は有効だということが身を持って証明できた
わけですね。

……まあ実験台は主にじぶんだったわけデスガ

ところで自分が10歳になったということは、婚約者であるカトレアは15歳になってるわけです。けどもまだ病気は発症していない……俺がやることで物語が変わったのか？それとも単純にまだ発症して無いだけなのか？その辺は確証が取れないが、万全を期して出来る限りの用意をしておかないとな。

実はそれ以外にもいろいろ研究してはいるんですよ？主に武器関係ですけども。

っていうか武装関係って言うべきかな？武器と魔法の融合というべきかネタと言うべきか……

「ディアスー」

ん？この声は…父上か？

「ディアスーいないのかー？」

「いますよ！工房の方にいます！」

この部屋に近づいてくる気配が二つ。ん？二つ？父上だけじゃないのか？

「ディアス、入るぞ？」

「だめです」

「っな！ディアスがグレた！？」

「父上以外にも誰かいますよね？僕の工房は基本的に立ち入り禁止です。というか

以前から入らせないようにしているでしょう」

「それは……そうだが……」

微妙に言いよどむ父上。まさか勝手に入ったとか？もしそうだったらOHANASHI
しないといけないが……

「とりあえず出ますから少し待っていてください」

「わかった。じゃあ広間に来るようにな」

「了解です」

ん……二つの気配が遠ざかっていく。それにしても父上と……誰だ？
覚えが無い気配
だったけど……まあとりあえず片付けて行こうか。

~~~~~少年整理中↓移動中~~~~~

「遅くなりました。ところで何か急ぎの用だったんですか？」

「いや、かまわん。急で悪いのだが外出の用意をするように」

「外出……どこかにいくのですか？」

「うむ……陛下からお前を登城させろとの命をうけてな」

「は？陛下……というと」

「フィリップ三世陛下だな」

一体どういう流れで陛下が俺を呼んだんだ！？……解せぬ……

とりあえず呼ばれたからには無様な真似は出来ないな。いくつかの薬と試作品の

武器武装を持っていこう。それにしても一体どういう用件なんだろう……

「まあ、私が陛下と張り合って息子自慢をしたせいなんだがな！」

「あんたのせいかなぁ！？」

## 7話 呼び出しだったりしてみたり（後書き）

相変わらず忙しいです。。。。

ついでに作者、転職しました。おかげで余計に忙しいです！

ということで他の作品もUPが遅くなるかもしれませんがが

待っててくれたら。。。きっとUPします！うんきつと

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7804o/>

---

転生だったりしてみたり？

2011年4月15日20時30分発行